

視察研修・研修会等報告書

議席番号 (2) 議員名 (榊 真衣子)

1 年 月 日 令和 8 年 4 月 13 日 (日数 0 泊 1 日)

2 場 所 ①渋谷区未来の学校青山キャンパス
②TKP渋谷長井記念ホール会議室C

3 視察、研修事項

- ① 渋谷区「未来の学校プロジェクト」青山キャンパス視察
- ② 育児 119 (民間シッターサービス) の取り組みについて

4 面 接 者

- ① 東京都渋谷区、渋谷区教育委員会 担当職員
- ② 株式会社夏のそら (代表取締役: 石黒和希氏)

5 視察研修、研修会の成果

① 渋谷区「未来の学校プロジェクト」青山キャンパス視察

・ 概要・施設規模 :

- ・このプロジェクトは、渋谷区が 2049 年度までに区立小中学校計 22 校を建て替える長期計画 (ハード面) と、探究学習や教育 DX (ソフト面) を掛け合わせた先進的な教育施策である。
- ・老朽化に伴う建て替え期間中に渋谷区の複数の学校が共同で使用する仮設校舎「青山キャンパス」(敷地面積 約 17,500 m²) を現地視察した。
- ・令和 7 年 9 月より広尾中学校・松濤中学校が使用を開始しており、令和 8 年夏には神南小学校が加わり約 900 名規模の児童・生徒が通学する予定となっている。

・ 先進的な教育・施設環境 :

- ・超大型の新 JIS 規格・昇降式デスクの導入やバリアフリー化、対話や協働を促す「ラーニングコモンズ」、最先端機器を備えた「未来共創空間 (みらそう)」など、単なるプレハブ校舎にとどまらない次世代の学習環境が整備されている。
- ・部活動で使用しない時間帯や休日に、体育館やグラウンド等を地域住民・周辺大学に開放し、地域資源としての利活用が図られている。

・ 長距離通学・交通安全への対応 :

- ・スクールバス : 中学生向けにはプロポーザル選定事業者委託による路線バス型を運用。小学校導入時には乗車管理システムや安全ベルトを完備した小型マイクロバス (約 20 人乗り複数台) を運行予定であり、国連大学等の周辺施設と連携して乗降場所の混雑緩和を図っている。

- ・自転車通学の柔軟性：

一定の安全基準を満たした生徒には自転車通学を認め、悪天候時にはスクールバス利用へ切り替えられる柔軟な体制を構築している。

【考察・所感】

自治体の規模は違うが、プレハブ校舎ではあるものの防災拠点としての役割を果たすよう設計されている点や、学校の体育館やグラウンドを地域住民等に開放している点は参考にできると思った。

また、建替え期間(数年間)限定の、各学校の学区ごとのスクールバスの運用体制構築の方法や、自転車通学者が悪天候時にはスクールバス利用ができるなどの柔軟な対応をしている点も、本市でも参考にしていきたい。

② 第二部：育児 119（民間シッターサービス）の取り組み

- ・ 概要・サービス特徴：

- ・株式会社夏のそら（代表取締役：石黒和希氏）が運営する、24 時間 365 日対応の緊急駆けつけシッターサービス「育児 119」について学んだ。

- ・電話、LINE により平均 1 時間以内（最速 30 分以内）に専門スタッフ（「頼ってさん」）が現地に駆けつける仕組みであり、累計 1,800 件以上の駆けつけ実績を持つ（リピート率 75%、マッチング率 92%）。

- ・ 運営体制・自治体連携：

- ・利用しやすい価格設定（基本料金 1 時間 1,980 円～）と、全国 650 名以上の登録者（保育士等有資格者および独自研修修了者）によるサポート体制を整備。

- ・ひとり親家庭支援連携や、ファミリーサポートセンター事業の受託など、行政施策との補完関係が広がっている。東京都ベビーシッター認定事業者への参入も予定している。

- ・ 児童虐待防止・孤立防止における効果：

- ・育児ノイローゼや産後うつ等で限界を迎えた保護者の SOS に即座に応じ、親の一時的な休息と精神的余白を創出することで、痛ましい児童虐待や事故を未然に防ぐ重要な「第一発見者・支援者」の役割を果たしている。

- ・ 既存シッターサービスとの違いと理念：

- ・単に「子どもを預かる（シッティングする）」ことにとどまらず、「保護者自身や家庭全体を支える」ことに重きを置いた家族支援サービスである。

- ・SOS を受け取った際のオペレーターやスタッフの第一声として「頼ってくれてありがとう」と寄り添う姿勢を徹底し、孤立する保護者が心理的罪悪感を持たずに助けを求められる環境（安心の基盤）を構築している。

・ 「頼ってさん」による、具体的な支援事例：

1. 包丁を握りしめるほど追い詰められた母親と子どもの命を救った事例

- ・ 状況・背景： 夫の長期出張が続き、慣れない土地で 3 人の子どもをワンオペ育児・送迎・家事・仕事に追われていた 35 歳の母親。疲労とストレスで発狂しそうになり、台所で包丁を握りしめ、ギリギリのところで自分を止めるため何度もまな板に包丁を刺すほど限界を迎えていた。
- ・ 駆けつけと結果： SNS で見かけた「育児 119」に電話したところ、お昼の登録から夕方のお迎えにはスタッフが到着。「どんなに救われたことか。子どもと私の命を救ってくれたと言っても過言ではない」と感謝の声が寄せられた。

2. ワンオペ育児で限界の母親が「2 年ぶりに 1 人でゆっくりお風呂に入れた」事例

- ・ 状況・背景： 頼ってさんが子どもを習い事に送った際、近くで SOS の連絡を受けて 15 分で駆けつけた事例。ドアを開けると母親は涙を流しており、部屋も暗く限界状態だった。
- ・ 要望と結果： 母親の望みは「1 時間でもいいから、ゆっくりお風呂に入りたい」というものだった。子どもを見守る間にお風呂に入ってもらったところ、上がってきたお母さんは「2 年ぶりに 1 人でお風呂に入れた。これまでずっとワンオペで 1 人でお風呂にも入れなかった」と語り、駆けつけた直後とは見違えるほど表情が明るくなった。

① 育児 119

育児 119 は単なる「子どものシッティングサービス」ではなく、「保護者自身や家庭全体を支えること」に重きを置いたサービスである点に強く注目すべきである。

実際の現場で対応するスタッフ（「頼ってさん」）から伺った事例は、自身の子育て経験とも重なり胸に迫るものであった。「頼ってさん」の多くも、かつて乳幼児の育児中に孤独や辛さを経験した当事者であり、「同じように悩む誰かを助けたい」という強い想いを持って行動している。この当事者目線と想いこそが、迅速な駆けつけ対応と利用者の深い安心感を支えていると感じた。

ファミリーサポートをはじめとする既存の行政制度は、事前登録や事前予約が必要であり、「今この瞬間に助けてほしい」という夜間・休日の緊急的な SOS に応えきれていない実態がある。“ファミリーサポート以上、児童相談所未満”の支援の狭間にこそ、産後うつや児童虐待リスクにつながる「限界の育児」が存在している。

保護者の孤立を防ぎ、児童虐待を未然に防止するとともに、誰もが安心して子育てに希望を持てる社会を実現するため、育児 119 のような即応性の高い民間サービスとの連携や柔軟な助成制度の導入など、当市においても積極的な政策提言を行っていきたい。
